
恋する姫と鋼の男

るー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する姫と鋼の男

【Nコード】

N78460

【作者名】

るー

【あらすじ】

注意！！この作品は蜀のキャラの大半が絡んでこないかもしれません。

特に桃香は2011年2月7日更新以降は出ないことが確定的です

【ネタ】です！恋姫系列の歴史を参照してますがところどころ違う部分もあります、三国志等の実際の歴史や人物像及び一刀のネタに納得できる人のみお読みください。

元は理想郷で掲載していた
恋姫英雄戦記になります。

誰がために泣く

舞い散る.....桜の花.....

浸る.....酒盃.....

囲む.....三人.....朋.....

桃色.....笑顔.....

褐色……女豹……

金色……霸王……

視界……一杯……淡い……蜂蜜色……長い髪……小さな体……大きな瞳……
……大粒……涙……

「い……………！主……………！……！」

「わ……………はち……………いら……………！……いいお……………なる！……だから……………！」

木魂……………

叫び……………

願い……………

トドカナイ……

微笑み
.....

諭す
.....

撫でる
.....

「.....」

鋼鉄の……

二度と動かない……

始まり

荒野

まずは落ち着け

一刀は水に映った己を驚愕の目で見つめながら思う

水面に映った人型ロボットのようなフォームをした姿……

自身の意識では水溜りを覗き込む行動を起こしているので間違いない
くソレが自分自身だと理解した

「一体…なんだってんだ……。」

まじまじと水面に映る姿で確認しながら己の顔を撫でる

触ってみるもののいつものように触れている感覚が伝わるが感触だ
けは金属に触れている感じが伝わってくる

そんな行動をしている一刀の後ろから声がかかる

「おめえ、めずらしい鎧つけてんな？」

チンピラのような中肉中背の中年の男の声に

「アニキいゝ、こいつ顔まで覆い尽くしてるぜ。」

一刀の正面に回りこみ顔を覗き込んでくる小男

「でっでも綺麗でかつこいい鎧なんだな。」

ぶつくりとした大男が一刀の横合いから声を上げる

すつかりと周りを囲まれた一刀にチンピラが声をかけた

「おい！！おめえ、その鎧と有り金全部渡せ！！そうすりゃ見逃してやんぜ。」

下卑た笑い声をあげながら男が一刀に告げる

回りの男共も同じようにニヤニヤと笑いながら一刀を眺める

そうして一刀は行動と共に答える

「てめえらにやるもんなんざ、ビター文ねえよ。」

言葉と共に覗き込んでいた小男の右の横っ面に正拳を叩きつけながら立ち上がる

グチャという嫌な音と共に小男の顔面が潰れる…鼻はありえない方向に折れ、殴った右側の頬が陥没し口からは歯が2〜3本飛び出た…

「ぎいややあああつあああ!!!!!!!!」

絶叫しながら顔抑えてのた打ち回る小男に

「チビ〜〜!!!!!!!!」

中背の男…アニキが叫びながら介抱に向かい

「し…仕返しなんだな!!!!」

ぶつくりとした大男は丸太のような腕を振ってくる

それに対して一刀は片手で大男の腕の内側を自身の箆手に類似する部分で受け止めた

「いつ…痛いんだな!!!!」

ぶつかった瞬間、鈍い音…素手で鉄を叩く音…が響き思わず大男は腕を押さえる

「うざい!!!!」

一刀の攻撃意思に反応して両腕の箆手部分より赤い三本の長い爪が

迫り出す

そうして一刀はそう叫ぶのが当たり前のように声が出た

「>ruby<>rb<水流爪牙>/rb<>rp<(>/rp<
>rt<すいりゅうそうが>/rt<>rp<(>/rp<>/r
uby<!!」

大男の腹にクロスさせた一撃を浴びせて斬り付ける

「痛いんだな~~~~~
!!!!!!」

大声で叫びながら出血する腹を抱えて転がりまわる

「でっ…デク~~~~~!!」

介抱していたチビを抱えて今度はデクと呼ばれた大男に駆け寄るア
ニキ

「ちっちくしゅ~~~~!!覚えてろ~~~~!!!!」

その捨て台詞と共にデクに肩を貸してスタコラサッサとチンピラ共
は逃げだしたのであった……

三人組の後姿を悠々と眺めながら一刀は自身の視界に映る各種セン
サー……意識すれば各種のセンサーが目映る……に付近の岩場の

影にこれまた三人の生命反応があるの確認する

「その岩陰に隠れている三人出てこいよ。」

淡々とした声で祐樹は声をかける

しばらくして

「これは失敬……なにやら物騒な気配がして赴いたのですが、様子からして加勢は不要と判断したので。」

そう飄々と答えるのは薄い青髪に白の着物を着て手に槍を持つ少女
ついで豊かな淡い金髪に人形を頭に乗せた糸目の小さな少女が表われ、さらにショートの黒髪に眼鏡をかけた知的な少女が姿を出す

「そうか……。」

一刀は淡々と答える、その言葉と身のこなしに雰囲気からして腕が立つのであろうと判断した

「しかし、変わった鎧を纏っておられますね……一体どこからおいでに？」

眼鏡をかけた女性が一刀に質問するが

「……他人にモノを聞くときは、まずは名乗るのが礼儀じゃないか？」

一刀はあえて低い声で返す

「……失敬…私は戯志才と申します。」

その言葉に失念していた少女は自己紹介し

「私は趙雲、字は子龍。」

青髪の少女が答え

「風は程立と言いますよ〜〜。」

力が抜けるような伸びた声で金髪の少女が答えた

「趙雲に程立だと……！！！」

その答えに一刀は驚き言葉が詰まる

趙雲は三国志における蜀の五虎將軍の一角、程立はあの曹操を知略の面で支えた人物の一人

三国志や戦国時代の話は一刀の趣味のひとつのため、その名に驚愕し

「それ……何かのコスプレか？」

疑うような目で彼女達を見つめる

「こすぶれ？」

風が首を傾げながら問い返す

「……………とりあえず、そちらが名乗ったのだから俺もな。」

コスプレを理解できていない彼女達にまずは己から言い出したことなので名を返す

「俺は北郷……北郷一刀だ。」

「…北が姓で郷が名……一刀が字ですかね？」

戯志才が聞く

「いや…俺が居たところは北郷が姓で一刀が名……字はない。」

「……風貌というよりその珍しい甲冑姿から異国から来られたと思っ
ていましたが、本当に……」

感慨深げに戯志才は頷いた

「すまないが、いくつか質問していいだろうか？」

「いいですよ……。」

風がのんびりと答えて一刀は質問を繰り返していった……

しばらく質問し、大体の状況等を一刀は掴む

「（つまり……今は後漢時代……およそ黄巾の乱が勃発した184年頃。場所は陳溜郊外の荒野と）」

内心で大まかな状況を浮かべる

「しかし……一刀殿の国では真名がないのか……。」

一刀の説明は己の出身国に真名という概念がないことに趙雲が心底頷いていた

「まあな……しいて言うなら君らが言う真名に該当するのが一刀だな。」

「なんと！……！！！！」「えええ？！？！」「くうくうくうzzz。」

驚愕する趙雲と戯志才……約一名はうたた寝しているが……

「初対面の我らにいきなり真名を許されるとは……。」

「……………」

「なれば、こちらも真名を預けなければ不公平というもの……私は星と申します。」

趙雲……星が己の真名を明かすが

「国が違えば風習も違うモノだ…君達にとっては重大なことでも俺にとっては些細なことだ…自身が認めた者と親族にしか許してないだろう？ならば無理に告げなくていいさ、君達自身が心から許してもいいと思うまでは字で呼ぶ。」

一刀は淡々と告げて

「心苦しいなら、君達も北郷と呼べばいい。」

「いえ…山賊三名程度でしたが先ほどの身のこなしから相当の腕を持っていると見受けします、同じ武人として感服しましたゆえでもありますので。」

星の言葉に一刀は苦笑する……表情は変わらないが雰囲気は伝わってくる

一刀は自身の爺様から古くから伝わる古流剣術を幼少の頃から習ってきた、両親を幼い頃に亡くし親戚をたらい回しにされていた一刀を不憫に思い

引き取った時から稽古を重ねてきた…その稽古とはデッド・オア・アライブ、生きるか死ぬかの二択しかない程の過激で凄惨なものであった

その一環で一刀は実際に人を斬ったこととである…爺様の伝で稽古の試験に中国マフィアを特殊部隊と共に潰すという課題もあったためだ…

「納得しているならいいさ……君達は無理に名乗らなくていい。」

前半を星に後半を風と戯志才に向けて言う

「……………そうですか、でしたら。」

ホッとしたような表情で返す戯志才に

「くうくうzzz。」

うたた寝したままの風

「「寝るな!!!」」

「おお?」

星と戯志才が突っ込む

「……………この子はいつもこんなのか?」

「「ええ……………」」

疲れたかのように二人は口をそろえて答える

先ほどの霧囲気からのんびりとした子だと思っていた一刀はさらに印象を深めた

「さて……………ここで立ち話もなんだ、ここからなら陳溜が近いのである?できればそこまで案内してもらえるかな?」

そうして、ひと段落ついたので一刀は場所を移動することを提案する

「そうですね…北郷殿はこちらの世界に疎いようですし、袖合っも多少の縁と申します…では一旦向かいましょうか。」

戯志才がそう切り出し

「そうですね……。稟ちゃんの言うとおりですし、風もお兄さんが気になりますよ。」

「ほお……。あの風が男に興味を持つか。」

感慨深げに星がにんまりと頷く

「はいです。もしかしたら噂のお人かもしれませんね……。」

のんびりとした声で糸目になりながら風は答える

「……あの都で噂の管輅という占い師が言っていた”天の御使い”か？」

「天より流星が降り注ぐ時、冷たき鋼の体を持ち赤き外套を纏いし者降り立つ。彼のものが向かうは未来……その寄る辺は争乱に満ちる。」

戯志才が管輅の占いをそらんじて三人の視線は前を歩く赤いマントをたなびかせる男を見つめるのだった

蜂蜜少女と夢と鋼鉄

陳溜への街道筋

一刀が星達と出会った場所より移動してから約40分程したところ
で街並みが見えてきた

「一刀殿、あれが陳溜ですぞ」

星が指し示す方角に見える家屋の数数に城壁と城が見える

「あれが……」

その光景を目にする一刀の胸に……何かが過ぎ去ると共に脳裏へと
何かの断片が流れ出す

「ぐっ?!」

「いかがされましたか?!北郷殿?!」

戯志才が突如、頭を抱えて呻く一刀に声をかける

「……いや……大丈夫だ」

かぶりを振りつつ一刀は近ずいてくる戯志才を静止させた

「うーん…お兄さんもこちらに來られてから休んでいないようだし……早く向かいましょうか。」

風がそう言つて先頭を歩き出す

そうして一行は門の前まで來たのだが……

「駄目だ、駄目だ!!」

二人の門番に足止めを喰らつてしまつた…

原因は今の一刀の姿にある

一見、珍しい全身鎧を着けている様に見られるため中に入るためには一度脱げと

陳溜はこの時代では大きな都市に分類される土地ゆえに不審者が入らないようにするためだ

「そこをなんとか通してもらえませんかね〜」

程立がやんわりと門番にお願いするが

「できんな!!どうしてもというなら……」

にやにやとしながら手で形を作り出す

「下種が……！！！」

その形を見た星は憤り、持っている龍牙を軽く回すが

「やめろ、子龍！！」

「ですが一刀殿！！！」

「いい……俺は駄目でもこの彼女達は大丈夫だな？」

「あつなにいつ……ひっ？！？！」

言い返そうとする門番を威圧し。

「大丈夫なんだな？」

イエス以外の言葉を封じる。

「あ……ああ」

相方の方がなんとか言い返す

「だそうだ……ここでお別れだな」

「なっ？！何を仰る！！私はまだ話を聞いてござらし……！そもそも真名を許したのに字で呼ぶとはこれいかに！！！」

星は荒れ一刀へと詰め寄り。

「風もまだお兄さんとお話したいことが一杯ありますので……、

「ここでさよならはどうかと~~~~」

糸目になりのんびりとした口調で風が答え

「……………」

戯志才は成り行きを見守っている

「……………だがな……」

一刀が口を開きかけたその時、ガラガラと後方より馬車の音が聞こえてき

そちらの方に一刀は顔を向けると窓の部分に当たる場所から蜂蜜色の長い髪に小さな顔で大きな瞳を乗せた少女と目が合った

「おお~~~~~~~~!!!!!!」

なにやら一刀を視界に納めた少女は感嘆の声を上げながら一刀を指差し

「七乃！七乃！！止めてくりゃれ！！」

はしゃぎながら少女は中に引っ込み、同乗している濃い水色の女性に指示する

「どうかしましたか？お嬢様？」

頭の上に？を浮かべながら七乃と呼ばれた女性は馬車を止め、止まったと同時に少女は扉を開け放ち一刀へと一直線に駆け出す

「つてお嬢さま?!……………考えたらずなとも素敵ですうゝゝゝゝ」

驚きの声を上げながら七乃は少女が走っていった前方を見て、一刀を視認すると体を少しくねらせながら少女を追うべく駆け出した

「ふおおおおゝゝ」

再度感嘆の声を上げながら、少女は遠慮もなしに一刀を観察する

「……………君は誰だい?」

小さな少女にジロジロと見られて、たじろぎながらも一刀は優しく問い返す

さすがに小さな少女ゆえに不躰な行動を頭ごなしに言ってもせんないことだと納得しての言葉だ

「ん? 妾か? 妾は美羽じゃ! 荊州の太守とは妾のことじゃぞ!!」

えっへんと無い胸を反らしながら少女…美羽は宣言する

「さすがお嬢さま!! 誰とも知らぬ人にあっさり自分の身分と真名を明かす! よっ! この大陸一のスカポンタン」

寝ているのか、貶しているのか、わからないセリフを吐く追いついた七乃

「うははっははは！！もつと褒めてたもう！！」

そんなセリフでも意気揚々と高笑いを上げる美羽に

一刀達はなんとも言えない表情を浮かべながら見守るのだった……

「で……君は俺に何かようかな？」

高笑いが終わったのを見て

先ほどの美羽と言う名からして一刀は真名であろうと推察し、君と呼びながら美羽に問いかける

「っと…名を告げてなかったな、俺は北郷一刀と言う」

「お主は北郷一刀というのか……、して一刀とやらお主の鎧はすごい……綺麗なのじゃ！」

ペタペタと美羽は一刀の鋼鉄の体を触るが

「おお?!?!なんだか温かいのじゃ?!」

手触りは鋼鉄なのに手から返ってくるのは人肌と同じ温もり

「それに……なんだか心が暖かいのじゃ……」

ぽつりと美羽が漏らす

彼女の心の中に、何とも言えない心を満たす暖かさが広がり

全身で一刀の右足に抱きつく

「お嬢さま?!」

「一刀殿?!」

「ZZZZZZZZ」

三人は驚きの声を上げ、一人は何故かお休み中……

「七乃!一刀を連れて行くぞ!」

そうして驚きを上げている者達に目もくれずに美羽は一刀の右足から離れて、マントの裾を握りながら宣言する

「おおおおお、お嬢さまああ~~~~~?!?!」

七乃は素っ頓狂な声を上げ

「なんじゃ?七乃」

首を傾げる美羽

「……………ちょっと待ってくれ」

自分を置いて話が進むのに耐えかねた一刀は口を挟むが

「お嬢さま!!!だめですよ!こんな得体の知れない人を連れて行く

なんて！」

口調はのんびりとしたものがあるが強めに美羽に言い聞かせようと
する七乃

「いやじゃ！いやじゃ！連れて行くというたら！連れて行くのじ
や！！」

駄々をこねて地団駄を踏む美羽、マントの裾を握りながらなので一
刀は少し引つ張られる感覚するが微々たるもの

ゆえに事態を收拾しようと美羽を抱え上げて話しに割り込む

「ほわあ！……暖かいのじゃああ……」

抱え上げられ、そのまま抱つこの姿勢となった美羽は恍惚とした表
情でつぶやき

「いやああつあ……お嬢さま……」

涙目で一刀を睨みつける七乃……事態が悪化したのを見咎めて戯志
才が話し出す

「とりあえず……名のある方とお見受けします。私の名は戯志才、
話は街に入ってからでもいかがですか？」

相手の身なりから推察し、戯志才は彼女達と一緒に街に入ろうと話
を振る

「……はあ、わかりました。中でお聞きしましょう……今のま

まだとお嬢さまも離れてくれないですし……」

七乃も状況を推察し、美羽の様子と一刀達の様子からその方が良いと判断して門番に話着一刀達共々中に入るようになった

ちなみに移動中、抱っこされている美羽は終始ご機嫌で……降ろそうとすると駄々をこねたため仕方なく……その様子を見ていた風は羨ましそうに美羽をこっそり糸目で見っていたのであった

陳溜 料理店

やつとのこととで陳溜へと入れた一刀達は七乃の先導でこの料理店へとたどり着いた

さすがに七乃が若干、美羽をしかるように諭したおかげで現在一刀は抱っこから開放されている

「さて……まずは各々の自己紹介から始めましょうか……」

全員が椅子に腰掛けて一息ついたのを確認した風が音頭を取って話し始める

「とりあえず、私からですね……風は程立と申します以後お見知

りおきを〜」

間延びした声で七乃と美羽に挨拶し

「戯志才と申します、以後お見知りおきを」

戯志才も簡単に自己紹介して

「私は北方常山の超子龍こと、趙雲と申す」

すまし顔で星は言葉を放ち

「で、俺が北郷一刀だ…異国から来たのでこちらのことに疎いのでな…粗相があれば勘弁してくれ」

最後に一刀が自己紹介して一刀達の自己紹介が終わり

「…私は張勲と申します。こちらにおわされる方が先ほど仰った通りに荊州太守の袁術様であられます」

つまらなさそうに自らと美羽の自己紹介をする七乃

宿について一刀が席についたの見計らって、美羽が駆け足で一刀の横に座ったのが面白くないのだ

今も何かと一刀へとちょっかいを出している

「やはり……袁家の方でしたか…」

戯志才が納得する…なおも馬車に付いていた家紋で十中八九当たり

をつけていたが

「では……まずは、お兄さんの話から聞きましょうか……」

「おい、風!」

星が風に詰め寄るが

「まあまあ星ちゃん、ここはお兄さんのためでもあるのですよ……
……ということでお兄さんお話、聞かせてもらっていいですか……?」

風は星を落ち着けながら話を一刀へと振る

「……聞かせるといつてもな……結論から言つと事故で俺はこちらに来たんだ……日本という国からな」

「日本……ですか?」

戯志才が訝しげに尋ねると

「ああ……この大陸から海を渡った島国にあるんだがな……そこから俺は来たんだ」

未来からなという言葉は心で呟きながら伝える一刀

「すると、一刀殿は海を渡ってこられたのか?!?!」

「ほ……お兄さんすごいですね……」

星が素っ頓狂な声をあげて風が驚いているのか判断に困る間延びし

た声を上げる

「七乃？海を渡るとは大変なのかえ？」

「はい、そうですね。お嬢さま」

美羽がやっと構ってくれたため七乃は上機嫌で答えた

「まあ……………な」

齒切れの悪い声で一刀は答え

「で、事故とはどうされたのですか？」

戯志才が事故について言及すると

「色々とあつてな……………気が付いたらあそこに放り出されていたんだ……………」

「そうですね……………」

何かを考え込むように伏せる戯志才に代わり今度は美羽が興奮した声を上げながら一刀に迫る

「なら、一刀はどこにも行くところがないのかえ?!」

「なんと?!いつもアンポンタンなお嬢さまがある意味確信部を突くとは?!?!」

七乃が心底驚いたという表情を出して声を上げた

「ああ……まあ……」

その迫力に若干押されて、一刀は頷く

「ならどうじゃ?! 妾の近衛にならんかね?!」

興奮冷めずに笑顔で下から見上げるように見つめる美羽はさらに言葉を放つ

「妾は荊州の太守にして、かの三公を輩出した名高い袁家なのじゃ!……何一つ不自由させんぞよ?」

「さすがお嬢さま!! こんな不審者を後先考えずに召し上げられようとするとは。よっ! この大陸一の考えなし」

「うはっははは!……もつと褒めてたもっ……」

七乃の悪口もなんのそのと高笑いを上げ、そうして上目遣いで一刀へと美羽は迫る

「どうじゃ? 一刀」

その言葉に一刀は、一度周りを見渡すと

風はいつもと変わらず寝ている

戯志才は難しい顔で、今だ考えている様子

七乃はニコニコしながらも油断なく一刀を見ている

星は飄々と龍牙を手入れしている振りをしながらもこちらを伺っていた

「……………」

正直に言うと一刀はこの話を受けようと思っている

今現在、一刀はこの見知らぬ土地に一人で放り出されている状態だ
路銀もなく寝床も食べる物さえない…なおもこの体が食事を必要とするかは、まだ定かではないが…

袁家といえば三国志でも有数の金持ちの家、そこに拾ってもらえたなら衣食住においては当面なんとかできるはず

美羽自身は幼い少女で今までの話しぶりからすると裏がなく、単純に自分に興味があるゆえの行動と納得できる

興味が尽きれば、放り出されるかも知れないがその間になんとか、身の振り方と路銀を稼ぐことはできるはず

一つ注意しなければいけないのは……

そうして一刀は七乃へと視線をやると

「……………」

につこりとこちらに笑顔を浮かべるが一刀には腹に何かを抱えているようにしか見えない

だが、そこさえ注意すればなんとかなると決断して声を上げる

「ああ、わかった。袁術……殿ところに厄介にならせてもらっ

その言葉に美羽は花が咲くような笑みを浮かべて

「さすが一刀じゃ……七乃！蜂蜜を用意するのじゃ……いまから宴なのじゃ……！」

大喜びで声を上げながら七乃に宴の準備を指示する

「は……い、わかりましたあ……」

七乃は返事をする店の人にどんどんと料理を持ってくるように言う

そうして一刀は再度、三人の方に顔を向けると

戯志才は先ほどと変わらず

風は糸目で一刀を見つめている

星はニヤニヤと一刀を見つめながら出される酒を煽っていた

そんな三人に視線やつている一刀に美羽が胸元にダイブしてくるが

……

「おおお……！痛いじゃ……」

元気よく飛びついたのが仇となり顔面を強かに打ってしまう

「だ……大丈夫ですか？袁術様？」

自らの主人となつたため、堅苦しい言葉遣いになる一刀だが

「むう……！一刀！そんな堅苦しい言葉遣いではなく普通に話してほしいのじゃ！それに妾のことは真名の美羽と呼ぶのじゃ……！それと一刀の真名を教えてくりやれ？」

額を押さえてぶう……と頬膨らましながら美羽は一気に言葉を放つ

「………わかつた美羽。それと俺の国では真名という概念がないんだ、ゆえに一刀が真名に当たる」

「うんむ、苦しゅうない　って初めから真名を許しておつたのかえ？！？！」

「君ら風に言つとそうなるな……」

肩をすくめながら一刀は告げると

「なんと……！！さすがは妾が認めた者じゃ　」

上機嫌になり一刀の首根っこに腕を回しながらすっぱりとその空間に収まる

当の一刀はこれからは名乗るときは苗字だけにしようと決めた

翌日 陳溜 門前

あの後、食事を取った一行……一刀は試しに食事を口に持つていく動作をすると勝手に口元の装甲が上下に分かれて口が姿を現したが内部を水に映したところ機械が犇いていた…

このことから一刀は自身の体が鋼鉄になっていると確信して落ち込むが美羽が悲しそうな顔でこちらを見つめてくるので、なんとか棚に上げて現状に意識をやる、なお食事は食べられて味覚も満腹感もしっかりと感じられた

そうして七乃が取っていた宿に星達も案内されて一泊とり、現在は昼となって出発と相成った

「さて、これで準備は完了しましたし行きましようか、お嬢さま」

七乃が馬車等の準備を済ませて美羽に声をかける

「そ……そうじゃの…」

なぜだか美羽は気乗りしないようだが七乃に答える

「そついえば……どこに向かっているんだ？美羽」

一刀は目的地を美羽に聞くと

「びっ！」

変な声を上げて一刀の足元に縋り付く

「か…一刀…聞くでない…」

涙目になりながら一刀を見上げる

「え…とですね…一刀さん北方のことはご存知ですかね？」

「まあ…大まかなことなら…たしか今は袁招が治めているだったか？」

七乃の言葉に一刀が答えたら

「ガタガタブルブルガタガタブルブル…」

なぜか美羽は震えだした…

「か…かす…いじわるしないでくりゃね…」

涙声に舌足らずな言葉で一刀を見つめる

「じっ…これは…?!」

「あ…その…お嬢さまは袁招さんが苦手で…」

「ぴ~~~~~!!!!」

七乃の言葉に一段とビクツと反応する美羽、そして周りをキョロキョロと見回しだす

「れ…麗羽姉さまは居らん……よな？」

「大丈夫ですよ〜お嬢さま〜。袁招さんは居られませんよ…
というよりこれから伺いに行くんですから…」

七乃が美羽を宥めながら目的地を明かす

「ぴっ!!……うっ…今度は何のようなのじゃろっ…麗羽姉
さま…」

肩を落として美羽がポツリと呟く

「さあ…？私にもさっぱりで……」

七乃も困った顔になりながら答えると

渦中の外に居た三人が口を挟む

「ということは……あなた方は袁招殿の所に向かうと？」

戯志才が声を上げると

「そうですね」

七乃があっさりと答える

「そうですか……我々は目的地が違つので……」

「？はいそれが？何か？お好きなようにしてください」

七乃はまったく興味ありませんという顔で答える

その言葉に啞然とする戯志才だが気を取り直して続ける

「では、ここで……北郷殿、お話できて幸いでした。御武運を」

そう言つて一刀に別れの挨拶を切り出すと

「ああ、世話になつたな。戯志才も元気で」

続いて星が言葉をかける

「一刀殿、次の機会にはぜひ手合わせを願いますよ……あとちゃんと真名で呼んでくだされ」

「わかつたよ……子…星」

子龍とすべりそうになつたところに星の鋭い睨みが飛んできたので咄嗟に真名で返した

「では」

そうして星が離れると今度は風が前に出てくるが……

彼女は一向に口を開く気配を見せない

「どうしたんだ？程立？」

その様子に一刀は訝しげに風を呼ぶが

「はぁ~~~~……お兄さんはわかってないですね~~~~」

深いため息をつきながら風は口を開きだす

「まあ、いいです……今後それは改善していけばいいので~~~~」

そうして言葉を発すると突然、風は臣下の礼を取った

「~~~~なっ?!~~~~」

その行動に全員が驚きと戦慄に包まれる

「程立?!何を……」

一刀は驚き、彼女を立たせようとするが

「昨晚、風はハッキリと夢を見ました」

たいして大きくない声だが不思議と一刀は言葉を止められた

「風が……赤い外套を追う夢です」

その言葉に場の雰囲気が変わっていく

「風はそれはためく外套を追いかけていました」

淡々と紡ぐ言葉にみな引き寄せられる

「風が追い続ける間も情景は刻々と変わっていききました……あた
り一面真っ赤な血で染まる大地、暗雲立ち込める空、轟々と燃える
家々、倒れふす人々」

「ですが」

そうして風が顔上げて一刀の目を見つめる

「赤い外套が過ぎ去った後は緑生い茂る大地、蒼穹の空、暖かなぬ
くもりを放つ家々……笑顔を浮かべる人々」

「ですが……反対に赤い外套はどんどんと黒ずんでいきました……自
身が流す血によって」

「思っただです。この方が風がお仕えする人だと……この乱世を導
く方だと」

「だからお兄さん……いえ、ご主人様……この私、名を程立から改めま
して程赤としあなた様に仕えることをお許しください」

再度、臣下の礼を一刀へと捧げる風に周りは動けず……そして一刀は
口を動かす

「頭を上げてくれ……程立……程赤、いや風」

一刀の言葉によろやく風は立ち上がり、一刀を見上げる

立ち上がった風の眼差しを一刀は強く見つめてかぶりを振る

「……………その目を俺は知っている……………」何か”を決めた者の目だ……………」

そう一刀は呟く程に、力強い風の目は現代に居た頃の戦いの中で時折見ることがある目と同じであった

「正直…風が言うような……………大それた人間じゃないさ…俺は」

自嘲気味に笑いながら一刀は告げるが風は……………

「……………言つて聞くようじゃないよな…本当にその目をした奴は厄介だ……………」

脳裏にある女性が描きながら呟く

「……………いいのか？」

「いいも悪いも風が決めたことですよ……………お兄さんにも覆せないことですの〜」

そういう風に観念した一刀は

「何が……………できるかわからんが……………よろしくな」

そうして手を差し出し

「はい……………」

差し出された手を掴む風であった

一刀が墜ちてきた場所 クレーター中心部

「ここかしら？」

金髪をサイドにクルクルと分けた馬に乗った少女は疑問の声を上げると

「はっ！華琳様、ここになっております！！」

傍らにこちら馬に乗った長い黒髪女性が華琳と呼ばれた少女に答える

「しかし、何があつたのでしょうか……これほどの大穴が開くとは……」

黒髪の女性の反対側に居る青髪の女性も疑問を浮かべる

「そうね……春蘭、秋蘭、付いて来なさい」

「か、華琳様！」

そういつて華琳は馬を駆つてクレーターを駆け下りていき二人はそれが続いていく

そうして彼女が降りた先には一刀達が居た頃には見かけられなかった一本の鞘に収まつた剣が大地に突き刺さっていた

蜂蜜少女と夢と鋼鉄（後書き）

ダイバーに詰まったり、気分転換に書いてるので
更新はかなり不定期になります……

愛という名の紗

一人の少女が外套を纏って

クレーターを観察していた

「ご主人様……………」

漆黒の艶髪を風にたなびかせる、その少女の名は関羽………… 真名を愛紗と呼ぶ

「いずこへ……………」

もの憂げな表情を浮かべる彼女が思い浮かべるは優しき少年の姿

想いを馳せ、今までの軌跡を思い返す

左慈・干吉が率いる人形の軍団を切り抜けて辿り着いた場所たる祭壇
主たる一刀が鏡に触れたことによって………… 全てがオワリに向かった
消えていく一刀

ただ、その身を引き止めたくて愛紗は懸命に駆け寄った

否。愛紗だけではない…星、鈴々、翠、朱里、紫苑、一刀の寵愛を受けたこの場に居る者全てが

懸命にその腕を伸ばしていた。が

それをあざ笑うかのように左慈の一撃が次々と仲間達に振るわれていった

平時……戦いの中において決して後れを取らない程の腕を持つ武将達である彼女達も

目前で消えようとする愛しき者へと全てを向けているために、避けることができずに凶刃に倒れ伏していく

朱里、紫苑、翠、鈴々

次々と倒れ伏していき……消えかけた一刀へと辿り着けたのは愛紗のみ

懸命に走りより藁にも縋る気持ちで手を伸ばすも

それすらも一蹴するがごとくに

伸ばした手は……トドカナカッタ

ただ、消え去るその瞬間

「愛してる」

声はこちらに届かずとも

その動いた唇を一字一句間違えずに読みとれ

視界は闇に覆われた

「気がつけば……時を遡り、私は始まりの地に居た」

未だ、流浪の身で用心棒の真似事をしながら日々を送っていた頃へと愛紗の意識は戻っていた

「これが……天の采配か、地獄の悪夢かはわからんが」

最初はひどく驚き、ついで一刀を捜し求めるも手がかり一つすら掴めず

途方に暮れたが……時を遡っていることに気づいた時

愛紗はこう思ってしまった

「今度こそ……守り抜く！！そして、あのご寵愛をこの身だけに注いでいただく……！！」

かつての志高く誇りに満ちた瞳は……暗い瞳へと化し

「私からご主人様を引き剥がす道は要らない」

何を見、何を感じとったのか……かつての愛紗とは掛け離れた雰囲気
を醸し出し

「だからこそ、私は鈴々を捨てたのだ……あ奴は私からご主人様を奪うから」

かつての義妹との出会いも捨てた

脳裏に浮ぶ無邪気な笑顔を向ける鈴々へと心の中の愛紗は冷徹な視線を向けてコワス

そうして浮かび上がった……皺くちやの老婆の言葉を思い出し

無数の蹄が残るクレーターを後にして彼女はこの場を去った

陳溜から冀州の道中

当たり前だが空は満点の星が煌いていた

「……ちがうな、当たり前じゃない。俺が居た場所は星なんて殆ど見えなかった…」

大地に背を預けて仰向けに倒れ伏す一刀はそう呟く

時刻は月が星と共に淡く輝く夜、一刀達一行は野営を取っていた

「やはり……ちがう世界なのか？……前に香港に来た時だって、こんな本当に天の川って言える程の星は…」

虚空へと消えいく言葉

脳裏に描くは昔、修行の一環で立ち寄った香港

そこで出会った薄い桃色に灰がかかったようでありながら風に吹かれれば、しゃなるような音を響かせそうな程長い髪を持つ褐色の女

あの街で出会い、紆余曲折があつたが……一年も共に居た女性

「お前は元気か？」

満点の星空を女に見立てて内心の気持ちを誤魔化すかのように吐く

「俺は……」

そう呟きつつ自身の体を眺め……………拳を握る

「俺は…どうなっちまったんだろうな…」

常の一刀では考えられない声音を洩らす

無理もない……………気づけば身一つで見知らぬ場所、その場所とて考えられないほどに文明の発達していない場所

聞けば聞くほどに己の知識にある三国志の時代背景の国

極めつけは…

「……………」

握った拳の感触はまさしく鉄を握るとはこういうことかと、頷きたくなる程……………硬い感触

水に映った自身の鋼鉄の体は紛れもない真実

状況に流され、超雲・戯志才・風に連れられて陳溜に辿り着き

運よく美羽に拾ってもらい…

ようやく今日が終わるというこの時間

この体でも睡眠を欲するのはたしかだ。先ほどから瞼が重く感じるが

「寝られるわけないだろう……………」

食事を取ることもでき、睡眠を欲す…人として当たり前のご飯の体は欲す

しかし中には鋼鉄の体で再現できないことは欲さない。普通なら人のサイクルが崩れれば精神の均衡が保てず…死んでしまうところが無意識の内にコレが正常だと体が自覚しているかのように違和感がなかった

「……………くそ」

ただ小さく悪態をつき

隣に一刀の赤いマントを布団代わりにしがみついて眠る風を見つける

「何一つ、先立つモノを持たない俺に付いて来るとか…君は正気なのか？」

その長く豊かな淡い金髪を梳きながら呟く

「…………ご主人様は風の決断を疑うのですかね…？」

いきなり、パチリと目を開けて真摯に一刀の目…………赤のツインアイへと向ける風

「風?!?!」

「はい。ご主人様の風ですよ…あんなことも、こんなことも好き放題に出来る風ですよ…」

「おうおう、兄ちゃんうらやましいこって」

普段より三割も増したようなまったりとした口調で返す風と

風の頭に乗った宝？が突っ込む

「起きていたのか」

「いえ、九割寝てましたね……」

アクビしながら返す言葉に引きつる

「タイミングが合いすぎだろう……」

「たいみんぐ？」

「いや、なんでもない」

一刀から出た見知らぬ言葉に反応し

「やはり、ご主人様は異国……いえ、天界からやってこられたのですね」

風は目を細め

「天界って……言っただろう風？俺は日本という国から海を渡ってこの大陸に来たと」

「そうですね。たしか事故とも」

「そうだ」

一刀が肯定すると風はおもむろに人差し指を立てる

「だとすると、おかしいですよ」

人差し指を振り

「ご主人様が居た場所は海なんて、とんと縁のない辺鄙な場所…むしろ内地帯。さすがに海から事故でそこまで飛ばされるはずがありませんよ」

「それに…風達の名を聞いたときの驚きよう。たしかに星ちゃんにはちょっとした有名人ですが…それでも一地方ですこし名が知られているだけ」

いつも欠かさず持っているキャンディー棒をビシッと一刀へと指し

「袁術様はたしかに大陸中に名が響く名門、袁家の方。しかし、それでも大陸の外へと名が響いているとは到底思えません」

「…」

風はよく自分を観察しているのか…一刀は率直に思うが

「まあ…でもこれ殆ど風の推測なんですけどね。根拠なんてありませんし」

指してたキャンディー棒を口に含めて糸目で流した……

「うおおい!!」

思わず浮かしかけていた背を大地に落としてしまう

「ですが」

今度は額と額が当たるほどに接近してき

「図らずも当たりのようですね。ご主人様の態度はわかりやすいですよ」

グリグリとその柔らかな頬を寄せてくる

「そのような厳つい仮面でも表情が駄々洩れですよ。そんなに悩むことじゃありません」

おっとりと言い含めるように風は言葉を紡ぐ

「風……」

「悩んでも解決できそうにはありません。それに風はご主人様がどんな姿でも風のご主人様に変わりありませんよ」

間延びした言葉に

「……ありがとう」

「なんだか、わかりませんが……どうも」

「けど…」

「けど？」

「…ご主人様つてのは勘弁してくれ」

心底疲れたような声音で伝えると

「ですね。なんだか風も違和感しかないのですよ……お兄さんでもいいですかね……？」

「なんでもいいよ……ご主人様じゃなければ……」

「では、お兄さんと呼ばせてもらいますね」

主従関係ではありえない光景だが……当人達が納得しているので問題ないだろう。と思う

「ふわあっあ………こんな時間に風が起きているのは奇跡ですね……寝ます」

言うだけ言って、そのままコテンと一刀のマントに包まって眠りだす

「ありがとぅな……風」

翌日

夜が明け

一向は袁招が居る地へと向かう道中

「ずるいのじゃ！！程赤だけ、ずるいのじゃ！！！」

やんややんやと駄々をこねる美羽

昨夜、七乃がやんわりとした表情でありながら目の色が完全に表情とちがい

それにビビッた美羽はその時も駄々をこねていたが即座に首をカクカクと振って馬車で七乃に包まれながら床に就いたが

今朝は早速一刀と話そうと、普段では考えられない早起きをして七乃の腕から這い出して馬車から飛び出すも……

目前に映る光景

一刀の赤いマントに包まれて二人、身を寄せて寝る姿に思わず大きな叫び声を上げた

そこから冒頭のように…ずるい！ずるい！とずっと喚いていた

「ですが…袁術様が来られなかったのが悪いかと？お兄さんは特に同衾を禁じておられませんでしたし」

「ぶつつつ！?!?!」

同衾と言つ言葉が風から飛び出し、一刀は吹く

「わあああん！！妾も一緒に同衾したかもおっおお～～～～！！」

大声で盛大に手足をバタつかせて喚き

「一刀は妾の近衛なのじゃ！！今日からは一緒の床につくのじゃ！！！！」

馬車の席に仁王立ちをかまして一刀へとビシツと人差し指を指す

「お・じ・よ・う・さ・ま？」

「ぴっ！！！！！！！！な、な、な、ななのと言われても決定たも！！！！！！」

小さな悲鳴をあげるも最後まで言い切る美羽

「お…お嬢様……？」

今までにない対応に驚く七乃

「決まりといっらきありはの！！！！！」

テンパリながらも美羽は己の主張を決定すると

「お兄さん……ちょっと大変なことが起きてるようです……」

のほほんと騒動を横から眺めていた風が

少し困ったという声音で馬車の窓から見える外を指す

「なっ！！！！！」

前方に見える村と思われる場所から火の手が上がっていた……

風がかわる時

凧（前書き）

思ったよりか筆が動かない…

スランプっていうより、書きたくないのが強いのか…？

しかも、量少ない…

風がかわる時 風

「くそっ！」

悪態一つ付いて鋼鉄の男。一刀は走り出す
場所へと 黒煙を上げる

「か、一刀?!ど、どこに行くのじゃ?!妾を置いて、どこに行くのじゃ?!」

駆け出していく一刀へと美羽が叫びを上げると

「美羽!わからないか?!」

立ち止まり美羽の方へと顔を振り向けてそう声を上げて

その顔を再び前方……黒煙が立ち上る村落へと向けた

「なぜじゃ?!一刀と妾には関係ないじゃろう?!」

美羽の叫びに

「たしかに……関係ないさ……!だがな、美羽!」

一刀は向かっていた道を駆け戻り……美羽の視線と視線が絡み合う
同じ位置まで腰を落とし

「俺は……！目の前で起きている惨劇から眼を背けるような、男にはなりたくない」

鋼鉄の顔は何一つ表情を変えはしないが……そのメタルエコーが掛かる声音には力が籠っていた

「ここで、眼を背ければ……俺は何の為に力を手にしたのか……！」

思い描くは原初の記憶

炎に包まれた中をひたすらに駆け走りながら、己の視界に映るは顔を失った二人の男女

「だから俺は行く」

思い描くは幾多の戦友達。褐色の肌に薄い桃色に灰がかかった長い髪を持つ女

幾多の友と女と共に駆け向けた戦場

「逃げる翼も……あがらう牙も持たない人達が　　血に伏せないように、笑顔で居れるように……」

思い描くは女と過ごした日々

酒が好物で浴びるように飲んで親友にどやされ、一刀のことをよくからかっていた女

その性格からは考えがつかないかもしれないが……世話焼きでお年寄りや己を頼ってくる者に笑顔で接する女

家の家督を引き継いだゆえに……酷く、己を捨て家に尽くす女

そんな重圧に耐え切れず、流した透明な涙を拭うことすら……流したことすら……わからなかった女

「俺は行く。美羽と風は張勲と共にここに居てくれ」

「か……かずとおお……」

涙目になってしよばれる美羽。しかし、一刀が告げた言葉に名を呼ぶ以外のことを発することはできず

「……ちゃんと帰ってきてくださいね。お兄さん」

いつも通りと言ってもいい糸目　だが、その小さな瞳は真摯に一刀へと向けられる

一刀は跳ぶように駆け出す

炎上する村落が見える

傍目から見ても、寂れ……略奪しようと思っても何も無いと思える程にみすばらしい村なのに

それでも、賊　　頭や腕等に黄色の布を巻いた男共は残された微かな食料や金品を奪っていく

こんな村まで襲わなければいけないほどに……賊すら貧困にあえぐのが今のこの国の現状

そして…

「くそっ！佐和も真桜も居ない時に！！」

そんな賊共から……村人を護るのは

癖の強いくすんだ銀髪をうなじから三つ編みにし、薄褐色の肌に所々…傷を持つ少女　　楽進・凧

武人を志す少女は会得した氣の技によって敵対するもの達を倒していくも

「数が……多いつ！」

彼女の後ろに居る多くの無力な村人達をたった一人で護りながら

「かかか！！おい、コイツ結構な女だぜ？」

「一気にかかりや、いくらコイツでも無理だろうよ」

「さんざん、仲間やつてくれたんだ…その体で払ってもらおうか」

下卑た笑いと下種な言葉に凧は

「誰がお前達など…！」

犬歯をむき出しにして威嚇するも、じりじりと賊共は間合いを詰めてくる

普段ならば……歯牙にもかけない者達に追い詰められるのはやはり、無力な人々を背に戦う為

しかし、凧には

この身に変えても貴様らに指一本触れさせん！

背後で身を寄せ合って震えるしか出来ない人々を護るために

絶対に護ってみせる！

武を身につけ、体中に消えない傷を刻み付け、閻王を纏って…真っ直ぐに生きる少女を

賊共が一斉に襲い掛かる

「烈火刃」

それを 鋼鉄が見過ごすわけが無い

「ぎゃあー!!」「げえ?!」「ぐへっ!!」

下種が上げる悲鳴には品性がないのは世の常

その身に飛来するのは鋭利な刃物………苦無

容赦なく男共を刺すと

「あ、あちいいい?!」「あががが?!」「腕が?!腕が燃えて?!」

罪に濡れきったその身を浄化せんと業火を迸らせる

一人は足に刺さりそこから燃え、一人は喉に当たり瀕死の所を業火が瞬く間に冥府へと送り、一人は腕が火達磨に包まれていく

「女と弱者に集る奴は……何処にも居る者だな!!」

メタルエコーが掛かった怒声を上げて一刀は烈火刃を放った姿勢
身を低くして疾走する体勢のままに…

残りの賊共へと切り込んでいく

「出る!爪ええ!!」

蒼く光る…朱に染まった爪。水流爪牙をむき出しながら

「その銀髪の少女！！後ろの人達を連れて俺が来た方向へと行けえ！！！」

銀髪の少女たる凧へと声を上げ

「野郎お！！」「やっちまえ！！」

襲い掛かってくる賊共を袂っていく

「！！」 助太刀感謝いたします！！さあ、みんな速く！！」

問答する暇が今はないのは凧にもわかる

正体不明の全身甲冑の……口調から男と推察できるも、聞いたことのない声音 メタルエコーが掛かった一刀の声に

一瞬、躊躇するもすぐ様に行動へと入る。今は一分一秒でも無駄にすれば……即、死に直結する場面

「逃がすな！！」「……………おうよ！！」「……………」

一人の賊が声を上げて、凧たちの逃亡を堰き止めようとするも

「行かせると思つか？」

悠然と血に濡れたかのように朱に染まるマントを翻し、水流爪牙を構えながら一刀が立ちふさがる

一拍の空白の後

「えりやああああ！！！！」

みすばらしい剣を両手で構えて、唐竹割りを仕掛けてきた賊の一人をかわぎりに……一気になだれ込んでくるのを

「行かせんと言った！」

両の水流爪牙で迎え撃つ

迫りくる唐竹割りを身を翻して避け、返しとして右の爪でその喉笛を切り裂き

その合間に近ずいてきた者左の爪で片腕を切り裂く

「うぎああっあ！俺の！俺の腕――！！」

襲い来る激痛と信じられない現状にその男が持っていた古ぼけた剣が落ち

「おりやあああ！」

正面から続いてくる者に……落ちた剣を思いっきり蹴飛ばして

「げへ」

その柔らかな喉笛に刃の部分をめり込ませると

一刀は迷わず……剣の柄を持って一気に引きちぎるかのように切り裂くも

「くっ…?!」

思わず呻き声を上げてしまうほどに あっけなく拾った剣の柄は粉碎され、刃は半ばから折れた。一刀の手によって

「ちっ……どれだけ脆いんだ?! いや、俺の握力が半端ないのか?!」

戸惑いの声を上げつつも迫り来る者達を両の爪…水流爪牙で切り裂き、もう一度相手が持つ剣を奪って使うも

「ぐげえっええ!!」

「同じか!!」

今度は相手の胴体へと突きを放つと……たしかに、貫くも柄の部分 が折れてしまい、賊の男の体内に刃が残された状態となる

槍を持っても、斧を持っても 結果は同じく、自身の体が装備する。水流爪牙と烈火刃以外は尽く壊れていく

「つくづくこの体は……!」

歯軋りしつつ一刀はそれでも迫り来る賊共を屠っていき

「ちっ…! 一番の獲物が無いのが辛いが…! これで越えるしかない

か!!」

両の腕から生えていると言ってもよい水流爪牙を

二桁に届くか届かないかまでに減らされた賊共へと円を描きながら
構え

「水流爪牙!!」

ごく自然に……洩れ出る言葉のままに一刀は身を捻り出す様に回
転させながら

掬うように一手を繰り出した後、スクリューのように群がる賊共を
刈り殺していき

「はっ!!」

最後の一人を爪を左右に振り払うように広げて
終幕とした

「……………これで、最後…か…?」

周囲を見回すと、微かに背を向けて逃げ出す賊共の姿が視界の端に
捉えられ

「ふう……」

べつたりと付いた血糊を払う為、今一度左右へと振るつた時

「あ…………あれだけの賊をこんな短時間に…………!!」

先ほどの銀髪の少女
やって来た

凧が驚愕の声を上げながら一刀元へと

「あ……あなたは、いったい……」

これが

これが、北郷一刀と楽進、真なる名を凧という少女の出会い

「……………」

無言のまま振り返る一刀

やがて

やがて、武人としての己も、少女としての自分すらも捧げると誓った男との邂逅

鋼鉄と純真なる恋姫の出会い

風がかわる時

凧（後書き）

とりあえず、注意事項として

この先、桃香は出ません。というより蜀のキャラの大半が絡んでこないかも…

小説情報にも乗っけておくので、蜀が好きな人は読まないことをお勧めします

鋼鉄のいきかた（前書き）

忘れた頃に更新と…

鋼鉄のいきかた

張り付いた血糊を弾き飛ばすように腕を振るいながら

「無事か？」

疾走してきた道へと村人達を退避させた銀髪の少女へと返す

炎が催す熱気の渦が…鋼鉄の男のマントを揺らめかせ

なお、一層のこと

「あ、あなたは？」

「自己紹介もいいが……まずは、火を止めないことには話しにならないだろう」

「え、ええ……」

銀髪の少女 風の問いかけに答える一刀は後ろをおっかなびつくりについて来て…不安げにこちらを見やる村人達へと

「動ける者は…水が無い者は燃えている物に土を被せろ！！それでも食い止められる！」

翻したマント越しに大きく叫ぶも…村人達は不安げな瞳でこちらを見返すものだけで

「……自分達の村だろう!!!自分達が動かなければ何もかも失うぞ!!!」

メタルエコーの声音に少しばかり苛立ちを乗せて檄を飛ばす

その声音に驚いた者達が…めいめいに動き出す

ある者は井戸からひたすら水を汲み出し

ある者は組みあがった水を担いで持つていく

ある者は一刀の言うとおりに土を掻き集めて火へと被せる

各々が出来ることを行いだす。だが、それでも 火の回りは大きく

「完全に火が回ってる家屋は残念だが諦めるしかない!!!破壊して、周りに延焼しないことを防ぐ!!!」

動き出した者達の中で…自身の家屋だろう。完全に火が回っている者達が一瞬、動きを止めてしまう

無理も無いことだろう。そう頭の冷静な部分が告げるの自覚する一刃であるが

「残った物まで火に巻かれてもいいのか?!まだ、その手に取り戻せるものまで無くしてどうする?!!」

さらに激を飛ばす。しかし

「…済まないが君からも言ってもらえるか?このままでは…本当に

…！」

村人達に激を飛ばしつつも自身も只管に土を纏わせた突風を巻き起こして火を食い止める作業を中断せず…

一刀の激に飲み込まれたように黙々と動いてた風へと告げる

「あ、え…？」

「なんだ？防人^{もりびと}ではないのか？」

「え、その…確かに戦える者ですが、自分はそんな」

一刀と風の言葉のやり取りを周りにいる微かな者達が見やる中

「なんでもいい！君は彼らを護る役目を負っていたのなら、少なからず俺よりかは言うことを聞かせられるだろう？」

「ですが」

「問答している暇はないんだぞ？！本当に全部無くしてもいいのか？！」

「…！　なぜ、なぜ…そんなに真剣に自分達のことを」

表情を変えることが出来ない鋼鉄の顔。しかし…声音に乗る真剣さは村人達以上ということは

出会って微かな風にも分かるほどに切羽詰ったものであり

「なぜも、くそもあるか！！目の前の災厄に手を貸さないような屑じゃない！俺は！」

風の問いかけに返しながらもに腰だめに蓄えた力を解放して…土塊つちくれを宙へと舞い上がらせて鎮火させる

「力持ちし者の義務を怠る様では」

脳裏に浮かぶは

薄い桃色に灰がかかったようでありながら風に吹かれれば、しゃなるような音を響かせそうな程長い髪を持つ褐色の女

長い艶やかな黒髪を毛先間近で纏めている。その色合いは鮮やかな桃色の牡丹の形のリボンで、ささやきのような音を響かせそうな程長い髪を持つ褐色の女

二人の女の姿。共に戦い、共に泣き、共に笑いあつた……掛け替えの無い友

「アイツ等に会わす顔がない！！」

血の宿命。継ぎし家の誇り。その重圧に押し潰されまいと真っ直ぐに立ち続ける姿を

再び舞い上がる突風の中……そう答えた一刀の姿を瞳に焼きつきその感情で見やり

「皆！！かの人の言う通りに動こう！！このままでは本当に、本当に全部失くしてしまう！！」

彼女の性格と行動を知る村人達はほんの少しだけ躊躇うも……迷いを吹っ切るように一層とキビキビと体を動かし始める

「ああ…風ちゃんの言うとおりだ！その人の言うとおりだ！」

「そうだ！まだ、俺達にやあ残ってるモノがある！！」

口々に自身を励ますように声を上げる村人達

そうして

「ありがとう。今まで…此处まで私を育ててくれて」

風は燃え盛る…己の生家を見つめてポツリと呟く

様々な思い出。父と母と共に居た記憶…残された最後の形見へと

走馬灯のように過ぎていく記憶の中を 最後は鋼鉄の男姿が

焼きついたかのようなその姿を

「父上、母上。風は……見つけました」

幼き頃から…貧困に喘ぐ村を見てきた

満足に食事を取ったことなど両手で数えるほどかもしれない

満足に遊んだことなどないかもしれない

だが、それでも 父も母も惜しめない愛をくれた

村が良くなる為に、賊共から守れるように

体中に傷を作っても、年頃の娘のように出来なくても……笑って自分を
見守ってくれた大切な人を

「もはや…何も手に残りはしませんが……」

この想い出と

構える。幼き頃より鍛えきた……たった一つの誇れるモノ。武。風の
武を象徴する “ 氣 ” を

「この思いを持って 生きます」

焼きついたその姿。一瞬の開闢。ここで生まれいずるのだ……風の
“ 恋姫 ” は

何時か、かの鋼鉄が 荒んだ世を

「はあああつあ……!!」

切り開く時を共に居るために

状況は安定した

鎮火した家屋から燻る煙。黒々になった村人達の顔に浮かぶ…微かな安堵

上手くいった。何とか、村の三分の一程度で済んだのだから

燃えた家々が崩れ落ちて…広場のような場所になってしまった場所に

村人達が各々、己の家族と抱き合う姿

「あの…」

焼けた家の柱をひっくり返して、何かを探しているように動き続ける一刀へと

凧が声を掛ける

「なんだ？…と、そう言えば自己紹介が済んでいなかったな」

一瞬だけ凧の声がした方向へと向き直った後…目当てのモノがなかっただろうか？

静かに柱を倒して、他の場所も同じように探しながら答える

「俺は北郷。………旅の者だ」

苗字を告げ、次いで美羽の近衛と告げようか瞬時した結果

この時代では無難な答えを告げる

「あ、自分は名を楽進。字を文謙。真名を凧と言います!」

一刀の答えに流暢にして大きな声で返す

その答え方に…体が固まり、恐る恐る凧の方へと向く

「…………なぜ、出会って…間もない俺に真名を告げる…?」

嫌な予感しかない

一刀がそう返しのも束の間

「おや、おや…お兄さんは手の早いことで」

何時の間にか凧が一刀の傍へと居り

「凧?!」

「あの…どちら様でしょうか?」

一刀が驚き、凧が?顔を浮かべて凧へと問う

「これはこれは…凧はお兄さんの臣下であり、肉奴隷でありま」

「嘘吐くな!嘘!」

凧の虚言に盛大に言い返す。スルーすれば人としての何かを失くし

てしまう故に…

「まあ、後半は嘘ですが…お兄さんの軍師しております。程赤と申します」

「こ、これは失礼しました。自分は名を楽進と申します！以後、お見知りおきくださいませ！程赤様」

「はいはい」

「ちょっと待て。突っ込みきれん…」

風の自己紹介にハキハキと礼儀正しく返す風。その風に軽く返す風

その物言いと状況 何時の間にか風は軍師。風の言い方はコレからも縁があるような言い回し。風の風を上と見るような言い方

それらに物申したい一刀であるが…

「…ああ、くそ！！自己紹介は終わっただろう。取り合えず、邪魔しないでくれ」

そう言って先ほどと同じように動き出すと

「あの、北郷様は何をお探しに…？」

「……様って、なんだ様って……」

とボヤクも 空気を引き締めて風へと横目で催促する

それに対して不思議そうにするも…一刀の横目の先を確認すると

「あ…」

「わかつたる？…遺体を探してる。たとえば、黒コゲだろうと」

助かったものが居れば…助からなかった者も居るだろう

広場で互いに無事を喜ぶ者達が居れば　　亡くした者を捜し求める者達も居る

今、一刀たちの視界に亡骸を見つけたであろう

男が泣きながら炭化した大きな腕と小さな腕に縋り付いている

「見るも無残になったとしても、家族の下に返してやらなければ浮かばれんだろう」

鋼鉄の瞳であろうとも…涙は流れるのだろうか？

それは分からなくても　その瞳の中にある悲しみは受け取れる。見て取れる

横目に見た男の姿を見据える一刀の緑色の瞳を風は見据える

「……？どうした？」

「いえ…自分も手伝います！あちらから見てきますので」

そう告げて駆け去っていく風の背を見て

「？」

「鈍いですね。取り合えず、お一人追加と言つことですね」

「はあ？」

どの“外史”においても基本的に一刀が一刀であることは余り変わらないのであった……

似て非なる金

？ 袁紹の居城 門前

「……どうしてこうなった」

人体では有り得ない低く鈍い音が体から鳴る

額に自身の手をやった一刀が発した音であり嘆き

目の前の光景を見やってのことだ

「大きいですね……」

「そうですね……現行の北方で最大勢力の方の居城ですからね。風ちゃんも驚くのも無理ないかと」

風の呟きにどこ吹く風の如くに風が答える

二人が前方に居れば

「……とうとう、麗羽姉さまと……ご対面なのじゃな……」

「ああ……縮こまる美羽様も可愛らしいです」

肩を落として、小さな体をより一層小さくみせる美羽

そんな美羽の姿にご満悦な七乃であり…

「うつ… か、かずゆとおお…一緒にこられりい…」

涙目で赤いマントを両手で引つ張られ美羽に迫られる

一刀を“七乃”としての視線と“張勲”としての視線

その二つを持って見つめる

「しかし…美羽」

「うつ…楽進の」

「ぐつ…！だが、美羽。相手は大将軍の位を持つ方なのだろう？」

「ふえ？なんぞ、それは？」

一刀の言葉に？顔となる美羽。それによって

…そうか。そう言えば没する前の最高位だったな…

未来人たる一刀の知識の中では大将軍という地位の人物で

思えば…美羽も風も…凧も本来ならば男。なのに…女

激動の日々故に…そんなことを失念していた一刀であるが

…納得できないが、目の前の現実を受け入れるしかないか
…言ったところで詮無いことだ

考え捨てる

「うつ…かずと」

「風の件を言われると……本当に、大丈夫なのか？俺が同席しても？」

「一刀は妾の近衛じゃ！近衛というたら、常に傍にるのが当たり前なのじゃ！」

無い胸反らして、小さな体でふんぞり返るように腕組みする美羽

風の件。それは…彼女が一刀と臣下として共に付いて来るという件

なんとか火を消しとめ、遺体の片付けも終わった頃に風からの申し出

それに対して、一刀は強行に反対し…現実問題

火に巻かれた村を再建するにしても護り手の風が居なければ

同じことが早々に起こるのは明白。故にそれを前面に押し出して諭そうとするも

涙目の風…終いには涙ぐみ懇願する形になり、それを見かねた風が一計を企てた結果

風の奴…あとで覚えとけよ…

目前の美羽の後ろでアレソレと風に講義する風を恨めしい視線で見

やる。が…

ニヤリと意味深な笑みで余裕綽々の態度

むしろ……見返してきた視線で一刀の背中に悪寒が走る様

頭を振って…腰を折って美羽の高さに持っていき頷くしか選択肢のない一刀であった…

「おゝほほほほほ！まあまあ！よく、いらっしやいました美羽さん」

全身、金。そう見間違えるような豊かなカールを巻いたふんわりとした金髪

礼節用の服であろう…朱色がメインであるが所々にふんだんに金の刺繍やら飾りが付いており

最初に見た城の大きさが示すように、懐の潤沢さが前面に押し出されたような出で立ちに

その高飛車な、ある種のお約束的な笑い上げる人物が

「お、おひさしぶりでございます…れ、麗羽姉さま…」

一刀の後ろに逃げ込み。麗羽から隠れる美羽

「あら、美羽さん。そんな所に隠れておら　　あら、誰ですか？」

玉座。というわけではないが居城らしく上座に座っていた麗羽が立ち上がり降りてくる

ほんの少しだけある段差。その中央に左右の筆頭たる

「今更ですか…麗羽様…」

ウルウルと瞳を^{つゐ}潤わせて嘆きの涙を流すは　　袁紹の二枚看板の一人。顔良こと斗詩^{とじ}

「嘆いてもしょうがねえぜー斗詩^{とじ}ー」

額に紺のバンダナを巻く勝気な少女にして二枚看板の残る一人。文醜^{いしうえ}こと猪々子

そんな二人の言葉など、どこ吹く風というように

見定めるように嘗め回す視線のままに麗羽は一刀の姿を見回して

「ふーん…まあ、よい作りの鎧ですことね。所々に……翡翠ですか。さぞ、名工が作り上げた一品でありましょう」

一刀の姿。鋼鉄の全身鎧姿の各所に埋めこまれた緑の宝玉を指して告げ

「流石は美羽さん。此れは私への贈り物ですかね？」

「さっきまで歩いてましたよー麗羽様…」

麗羽の勘違いな物言いに斗詩が突っ込むも

それ以上に

「ち、ちがいます！麗羽姉さま！！一刀は妾の近衛でありますのじや！」

依然として美羽は一刀の背中に隠れたままであるが

大きく顔を出して麗羽へと一気に早口に告げる。まあ…言った後はすぐさまに背中へと隠れるが…

「……お初に御眼にかかります袁紹様。私、袁公路様の近衛を勤めさせて頂いております。北郷と申します」

背後に隠れた美羽が見えないように配慮しながら、片膝ついて頭を垂れる一刀

「ほー…美羽さんの近衛ですか。うん？それにしては…えー、あー」

「麗羽様ーもしかして張勳のことですかねー？」

麗羽が一刀を見、そして常に美羽と共に居る女性の名を思い出そうとすると猪々子が助け舟を出して

片手の掌を軽く拳で叩いて

「そうそう。その方です…その方はどう致しまして？」

麗羽の言葉にちょこんと顔を出して斗詩を一瞥した後

「その者に…付き人は一人と言われたのじゃ。じゃから七乃は留
守番なのじゃ」

その言葉に苦笑いと冷や汗を浮かべて

「そうですね…まさか、張勳さん置いてくとは思わず…」

斗詩的には全身甲冑たる一刀を牽制する意味合いで一人だけと告げ
たつもりなのだが

現状、美羽のもっとも興味が有り傍に侍らしておきたいと思う気持
ちが一刀の方が勝っており

まさかの…

「ぐす……みうさまのばか……」

「おお、よしよし」

「げ、元気出してください。張勳様」

城の待合室の隅っこでイジケて暗雲を纏う七乃を

風が宝？の手で持ってあやし、凧も元気づけるように言葉を紡ぐ光
景があったり…

場面は戻って

「ふーん…美羽さんの近衛ですか…」

訝しげな目で頭を垂れる一刀を見下ろす麗羽

物言いたげな視線であるが…一刀は頭を垂れている関係上

視線の棘には気づいているも主の美羽に泥を塗ることになるゆえに黙って甘んじ、美羽は美羽で麗羽への苦手意識の強さに何も言い返すことなく一刀の背に隠れるのみ

「まあ…よいでしょう。命に代えましても美羽さんをお守りなさいな」

「はっ」

「では、美羽さん。今宵は二人で積もる話に花を咲かせましょう」

満面の笑みで美羽へとそう告げて近づくこととするも

「ここここ、今夜は一刀と一緒に寝るのを約束しておるのじゃ！麗羽姉さま！」

麗羽と一緒に夜を明かす等…拷問にも等しい

そう考える美羽はこの前の風と同衾事件から未だ果たせていない事

案を前面に押し立てて言い返す

そう告げられた麗羽が

「……なんですってー！ー！！」

「ぴっ？！？！」

爆発するのも無理ないことかもしれない…

麗羽の姿に小さな悲鳴を上げてガクガクと体を揺らして一刀にしがみつく美羽

それが余計に麗羽の勘に障り

「み、美羽さん…この私、この袁本初、麗羽よりも…その甲冑をお取りになるのですか…」

グラグラと煮えたぎる憤怒が飛び出すのも時間の問題のような形相に
より一層と一刀へとしがみつくしかできない美羽。正直、多分…彼女
は少しチビッてしまっているに違いないぐらいに

「い、いくら！いくら良い甲冑を纏っておろうと！！この袁家筆頭
たる私の足元にも及ばない雑兵ごときが美羽さんと同衾ですって？
！」

怒髪天さながらの狂騒で怒る麗羽。幼いころより可愛がってきた美羽を盗られたという思いが作り出す怒気に…

参ったな……どうするんだよ。これ

頭上で行われるやり取りに内心で溜息を吐くしかない一刀

一刀から行動を起こせばどうなるかわからない。仕方なく現状維持

かといって美羽が自体を収められるわけもなく。彼女も現状維持

となれば……

「い、猪々子さん！」

「はいな」

「殺つておしまいなさい！！！！」

「あらほらさつさ」

「つて、待つてください麗羽様！文ちゃんも斬山刀ざざんとつ持ち出さない！！」

麗羽の激発に簡単に承諾する猪々子。その二人を止める斗詩

中世のグレートソードを沸騰させる野太い……力で押し潰す大剣を持つ猪々子を物理的に押し止め

再度、麗羽へと斗詩は言い募る

「ね、麗羽様！そんなことしたら」

「黙りなさい！！斗詩さん！猪々子さん、早くおやりなさい！！」

金切り声そのままに絶叫する麗羽の殺気のような感情を頂うなじで感じ取りながら…

……正気か？資料のような人物とは到底思えん…しかし

幾らか知っている三国志の人物象に載る姿とまるで違う麗羽の様子に

性別が変わっている世界だ……瓜二つとはいかんか…まあ、
いい

まるで現在の状況がどうにでもなるような心境で

…。子龍並みならいざ知らず…

伝わってくる喧騒の中…大剣を持つ猪々子の腕前を大体把握しながら

刃渡りが長い。美羽に当たらないようにしなければ

何時でも体が反応するように構える

一触即発の空気の中動き出したのは

「う…うう。びいいいいいい！！」

張り裂けるような泣き声を上げだす美羽だった

場の空気が一瞬にして気まずいモノに…

麗羽が猪々子を見やり、猪々子が斗詩を見やり、斗詩が両手を挙げ
て涙目になるも

三人は誰も動き出すことができず

「うつつええつええー！ー！」

「美羽。おいで」

「か、かずゆつとおおお……」

ただ一人、頭を垂れていた一刀だけが身を起こして

片膝ついたままに美羽へと振り返り両手を差し出して懷を空ける

間髪いれずに鼻水たらしめて涙声のまま、一刀を呼びながら飛び込む

くしゃくしゃになった小さな顔を鋼鉄の胸板に押し付けながら

そうして美羽を懷に抱きいれた一刀はそのまま抱っこして立ち上がり

「我が主は気分がよくないご様子」

立ち上がり背を向けたままに麗羽たちへと紡いでいく。淡々と

「失礼であるが、近衛たる私にとっては主のご気分が優れない場所に
主を置くのは身が引き裂かれる思いだ」

遠まわしに

「袁紹殿には失礼であられかもしれませんが…この場は引かせて頂きたく存じます」

有無を言わさぬ言葉

「余興は誠、我が主の身を震わせる結果となりまして甚く感謝致しまする」

興奮と歓喜に震わせるも悲壮と恐怖に震わせるも…どちらも結果は身が大きく揺れるのは同じ

痛切にソレを皮肉って

「つきましては後日。私直々がお礼をさせて頂こう存じますゆえ…」

そう冷徹に言い切って室内から静かに出て行く

「……文ちゃん」

「ああ。アタイよりも強いさ、それは知ってるけど」

肩で担ぐように持つ大剣を降ろしながら

「勝負は博打。勝つも負けるもその日の運！麗羽様の命もあるしな」

そんな二枚看板の二人とは違い…

「きい~~~~~！美羽さんを抱っこしていいのは私だけですわー！
ー！」

「「ああ……そっちですか」」

麗羽の見当違いな怒りに二人揃って溜息を吐いた

？から陳留 街道 袁家馬車

「それで出てきたわけですか？」

風の質問を皮切りに

美羽以外の全員の視線が一刀に集中する

泣き疲れて腕の中にいる美羽をあやしなやかに

舗装された道とは異なり、ガラガラとけたたましい音を上げているにも関わらず

安心しきった寝顔を見せる美羽とそれを抱える一刀を中心に

左は風。右は七乃。御者には風という配置で話が進む

「……こちら袁家直流の血筋を持つ美羽だ。ベストとは言わない

が…ベターな選択だったと思いたい」

「？ベすと？べたー？」

「……意味のわかる言葉で言ってください。“島国”特有の言葉は大陸では通用しませんよ」

風が一刀の話の中で理解不能の言葉を舌足らずな言い方で復唱し

七乃が無然とした顔つきでつつけんどんに返す。美羽が一刀の腕の中というのが気に食わない為に

「ベストが最高。悪くないがベター。この場合：最高ではないが悪くない選択という意味合いだ」

七乃の物言いを気にすることなく説明する

「ふむ…まあ、追ってがかってない事から問題は無かったようですね」

暢気に糸目になりながらも

「ですが…結果が良かっただけの事、あまりこういう対応は良くないですよ。これからはちゃんと風を連れてくださいな」

「…そうか」

「あんまし納得いってないみたいですな～お兄さん。まあ、確かに着眼点はよかったですがお兄さんは厭くまで袁術様の一臣下」

ピツと宝？が抱えていたキャンディー棒を掴んで一刀へと向け

「それを超えている部分がありありと見えておりますね〜聞いた感じでは〜」

間延びした声音とは裏腹に心配げな感情が少し含まれた視線

「……あまりこういうモノは俺には向いてないな。やはり、“アイツ”の真似事が精々か……」

脳裏に浮かぶは…親友の破天荒な行為に毎度、掛けた眼鏡のズレを直しては怒気を抑えていた黒髪に褐色肌の女

「…今。風以外の女性を思い浮かべましたね」

本当ならば頬でも太ももでも抓ってやりたい風だが……あいにく相手は鋼鉄の体ゆえに恨めしい視線を向けるしかない

「？なぜわかる？」

思案顔で思いを馳せていた一刀は風の言葉に疑問を浮かべた空気を纏って返す

御者をしている風からも…その発言で少し身が固くなったが一刀には察せず

「お兄さんは…もう少し女性の扱い方も覚えたほうが宜しいですね…風がみっちり叩き込みます。風ちゃんもお願いしますね」

「?!…じ…自分は、その……」

冷たい視線で返しながら風へと振る。当の風はあたふたと答えるしなく…しどろもどろになりながら馬車を操り

「とりあえず、脱線していますから戻しますよ。まあ…北郷さんが美羽様を思いやっでの行動ですから、それ自体には文句は言いませんが」

剣呑な雰囲気の中、七乃が脱線しまくっている話を戻し

「相手が“袁紹さん”でなければ…今は程赤さんの言うとおりに追っ手が放たれていたと思いますよ？」

表情はほんわかかな笑顔なれど…先ほどから雰囲気と痛いくらいの視線で一刀へと言い放ち

「もう少し、慎んだ行動を心がけてくださいませ。ですので…美羽様は私が預かります」

言いたい事を伝え終えた七乃は、そのまま一刀から引っ手繰る様に眠る美羽を抱き寄せて

一刀と距離を少しでも取るように、狭い馬車の隅へと寄る

それに対して 肩をすくめる一刀。そんな一刀をわかってないな」という視線で温かく見守る風

「あ、いえ…その、嫌ってわけではなくて…ですね。その、自分は…体中傷だらけで…」

御者をしながらも風の言葉にいまだにモジモジと身をちぢこませる
風であつた

そうして……風から現状の情勢やらなんやら聞きつついた一刀達一行

「……地鳴りがします。一刀様、風様、張勲様。ご用心を」

「ああ。それと風……次、様つきで呼んだら説教な」

「そ、そんな？！どう呼びしろというのですか？！」

御者を務める風の耳に……数十の馬が行軍する独特のけたたましい蹄
の音が届き

顔を引き締めて一刀達へと警戒を呼びかけるも、一刀の一言によつ
て一度崩される

が……油断ない一刀が馬車より降りてきた空気で風も一瞬で持ち直す
目前には街道の道しかないが……音が鳴り響くは街道脇。一刀達から
見ては左の方面の丘より

数十騎の群れ。誰も整然とした動きであり、統一された武具を纏う
兵士。軍

その色は濃紺が基本色となり

「全体止まれえっえっえっえ!!!」

軍の先方を駆けていた三人組みの一人

おでこを全開にした長い黒髪を持つ赤を基調とした鎧服に纏う女性の声に

付いて来ていた者達が一斉に止まる

「済まぬが、その旅人達よ。付近で十人前後の人群れを見なか

」

武装した兵士達が丘から現れ、街道へと乗りつけた

それだけを見れば警戒に値するものであり。当然、一刀達…と言っても闘えるのは凧と一刀の二人だけ

そも外に身を曝しているのも二人だけであるが そんな二人に警戒を解くように柔らかに声をかける始める。途中で息を呑み、一刀を驚愕の眼で見やりながら

先の声上げた女性とは対象的な青を基調とした鎧服

髪は短髪にして空色。先の女性が勇猛そうであれば…彼女は理知的な雰囲気を持っている

「秋蘭?どうしたの?」

空色の髪を持つ女性に中央。両脇をつめる二人とは対照的に幼い…

いや、少女と言つべきぐらい背格好

先の麗羽のような……淡い金とは違う。しっかりとした輝きを放つような金髪を両サイドにクルクルと巻いた髪型

そうして

「はっ！いえ…何でもございせん。華琳様」

「…ならいいわ」

どんな仕草をしても、彼女は絵になるであろうと一刀は直感する

その身に纏う。いや 纏い…つかざる負えない

身の丈とは比べられないほどの…覇気

優雅に馬上から一刀を見下ろす表情は

「貴方達、この近くで人影を見なかったかしら？」

覇王の片鱗を内包している

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7846o/>

恋する姫と鋼の男

2011年9月9日01時32分発行